

いま協同を拓く
2004全国集会
inながの

住民とともに60年 —佐久総合病院の実践

リレー報告

西垣良夫(JA長野県厚生連佐久総合病院健康管理部長)

ただいま市長さんが大変楽しい子どもさんの食をめぐる話をされて、本当に子どもさんたちの姿が目浮かぶようですね。私は町の教育委員をやっていますので、数日前、佐久地区の学校の先生方に、「健康教育」の研究授業に呼ばれました。テレビゲームは心身に良いか悪いか、というテーマでした。6年生の子どもたちが右と左に分かれて、ディベートと言いますか、良いか悪いかを良い立場、悪い立場で言わせる。1時間にわたって正味50分くらい行います。教育委員は教育内容

や授業に関して介入しないという立場ですので、静かに、しかしおかしいなあと感じながら聞いておりました。今の市長さんのお話を聞いていて、あのような授業をやったほうがずっとためになると思いました。

その6年生のクラスには、一番長くて1日に570分間テレビゲームをやっている子どもさんがいました。私の家にも子どもがいますが、どういうわけか遊び遅れまして、今高校生になって初めてテレビゲームに狂っています。こんなことなら小学校時代にやらせておけば良かったと思います。あんなものは数年経てば飽きるはずなんですね。余計なことを申しましたが、今の市長さんの実践的なお話に大変感激をいたしました。

「たたかい」と「協力・協同」の歴史

それでは、私どもの「住民とともに60年」という佐久病院のお話をいたします。佐久病院は歴史的にいろいろなことをやってきました。集会の実行委員長松島先生は、1950年代から佐久病院でお仕事をされてきました。私は1970年代からいろいろなことをやってきました。佐久病院は農業協同組合の病院です。開設は日本が戦争に負ける前の1944年で、当時農協は産業組合と呼ばれていました。農民の方々が自らお金を出し合って開いた病院ですから、協力や



協同は当たり前のようにやらなくてはいけないといえますか、骨身にしみていなくてはいけないわけです。ただ仲良くすればいいということではもちろんない。闘いも相当やってきました。例えば、病院が始まった頃はまもなく敗戦という時期で、その後、レッドパージが起こったりしています。その時に、地域の皆さんが大変な署名運動を展開して、病院の幹部のレッドパージをやめさせたということまでやっていただいています。

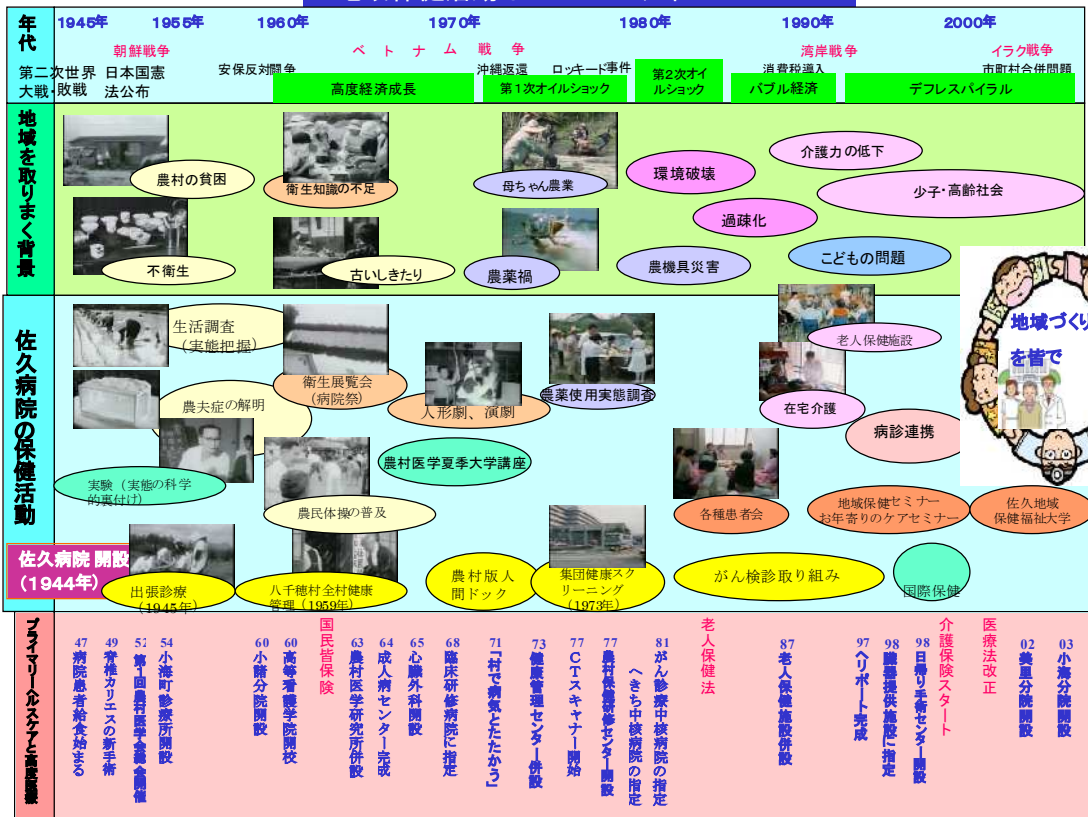
佐久病院の職員は開設当時数十人でした。今では正職員が1600人で、南佐久郡では最大の働く場所になっています。臨時やパートの方も数百人働いています。人口が1万6000人の町にそういう病院があるというこ



とです。今、我が国で働く場が増えているのは唯一、福祉の分野だけなんです。ほとんどの分野で雇用が減っているという数字が出ていましたが、毎年80人の若者が私どもの病院に就職します。

佐久病院全景の写真にHの字があります

地域保健活動はコミュニティとともに

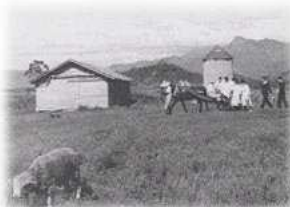


農民とともに

～農村医療に取り組んで六十年～



昭和21年当時の全従業員



無医地区への出張診療
(昭和27年～)



八千穂村での健康管理活動
(昭和34年～)



国際農村医学会を当院で開催
(昭和44年)



農村医学夏季大学講座
(昭和35年～)



国体軟式野球大会V2達成
(昭和58年)

が、これはヘリコプターの着陸場所を示しています。ヘリコプターが1日に2回来たこともあります。ヘリコプターが来ればいいというわけではありませんが、佐久病院は、三次救急も含め高度な先進医療とプライマリーヘルスケアと呼ばれる、昔からずっと大事にしてきた第一線の保健・医療・福祉の二足の草鞋を履くことをやっています。それを実践することには大切さと苦しさがあります。

私の仕事は保健予防です。先輩がやってきたことをいろいろ勉強させていただいていますけれども、やはり何よりも若月俊一さんですね。「プロジェクトX」というテレビ番組にも取り上げられました。なんとと言っても大事なのは、出張診療から始まり、1959年からの八千穂村における村ぐるみの健康管理の取り組みです。その後1973年か

ら、長野県全体の集団健康スクリーニングをやっています。これは、八千穂村でやったようなことを全県でやってもらえないだろうか、農協婦人部（現在は女性部）の皆さん方が声を大きくされて要求したものです。

私どもは、「農民とともに」、「住民とともに」ということでやってまいりました。最初は「農民のために」と言っていたんです。でも、「ために」というのは、本人がそう思わなくても、もしかしたら上から見ると意識があるかもしれません。そこで今では「農民とともに」と言っています。我々の病院のテーマソングにも「農民とともに」という言葉が入っています。そういう心を守っていこうということでやってきました。

保健・医療・福祉とかなり広範なことをやっていますが、実は今の医療制度の仕組

みでは大変苦しい面があります。とくになりにくくなってしまったわけではないのですが、地域の要望に応じてやっていくうちに、大きな複合的な仕組みを持つ病院になってしまいました。ですから、なんとか上手くやっついこうといろいろな運動をしています。労働組合の皆さんも、地域の皆さん方の健康を守るということのスローガンとして掲げています。そういう意味では私たちは大変感謝しております。若い職員に時々、これは仕事ですか、運動ですかと問いつめられますが、何となくグニャグニャ言って言葉をごしています。難しいところもありますが、やはり仕事だけではなく運動的な精神も大事だと思っています。

国民皆保険制度を守ること、憲法9条を守り育てること

我が国は今から40年ほど前から国民皆保険制度になっていますが、これはやはり大事にしていきたいと思えます。アメリカには無保険者が4千数百万人います。2億8000万人の人口のうちの4千数百万人です。アメリカでは私的な医療保険が主です。国民皆保険制度ではないんですね。今、国保の運営協議会でいろいろ論議していると、国民皆保険制度がだんだん崩れだしていると感じます。厳しい経済情勢の中で社会保険から国民健康保険へ移行する方がたくさんいます。そして保険料を滞納せざるを得ない方も増えています。いろいろな事情がありますが、いつでもどこでも誰でもが必要十分な医療を受けることができない状況も少しずつ生まれています。やはり国民皆保険制度は是非守っていききたいものだと思います。

それから憲法9条を守ること。保健・医療・

福祉の仕事をしていて一番困るのは戦争です。戦争は最大の健康破壊だと考えています。そういう意味から言っても、戦争だけは困ると一貫して言い続けてきました。実際、保健・医療・福祉の仕事をしながらいくら叫んでも国会で勝手に変わってしまう部分がないぶんあります。今、大変きな臭い状況ではありますが、日本が戦争に出ていく国にならないように、実際の仕事をしながら、地域の人と酒を飲みながら、大事なものはこれだということを語り合いながら、良いものは後世に残していきたいと考えています。